

第 6 回諏訪湖環境研究センター（仮称）のあり方検討会における主な発言

R1. 12. 19 クリーンレイク諏訪

■ 諏訪湖環境研究センター（仮称）のあり方（素案） 研究機能

（沖野委員）

- ・ 県内の水環境の研究が主体に行うのであれば、諏訪湖水環境研究センターなどほうがわかりやすい。資料収集に関しては、千曲川については国土交通省の管轄であり、国交省に県内の水環境の膨大なデータがある。河川工事事務所など国土交通省の国機関との連携が必要。一級河川、関係ダムについては国がデータを持っている。

（今井委員）

- ・ 当初は、県内の水環境全てを対象ではなかった。今回、明確に県内の水環境全般にセンターが対応するとしたことは良い方向性。他県はそうやっていない。長野県が、他県とは全く逆の方向でやろうとすることは新しい方向であり、筋があっている。

（小野沢委員）

- ・ 環境と人の暮らし、産業等とのバランスをとることが大事。諏訪湖の面積に対する流域面積が大きいことから、川上の出来事が諏訪湖の水環境に大きな負荷を与えている。諏訪湖の水質浄化を考えたときに、もう少し幅広く捉えていく必要がある。山岳環境や産業、人の暮らしがどう水質に負荷をかけているかなどの研究が連携していくことが持続可能な諏訪湖につながる。

（宮原委員）

- ・ 行政課題を解決するためと言われても何を行政課題にしているかがなく、目的が分からない。課題としてデータが有効活用されていないとあるが、そうしたことが必要ないなら、そうなっていても問題ないと思う。データが活用されないとどういう目的が達成されないのか、目的を書けるところは書いたほう何をしたいのか明確になる。

（今井委員）

- ・ 行政課題は、県が重要と思った課題。それが下に降りてきて、やるかどうか決定する。センターにとっては何が行政課題かは関係ない。センターが行政課題を全部やるわけではなく、承諾した行政課題を一生懸命研究して、行政の課題を解決するということ。

（井上委員）

- ・ 総合学習館でも国の天竜川河川事務所と連携を取ってやっている。国の機関の連携も必要。様々な機関で研究を行い、データもそれぞれの機関で持っている。それらを整理していくということだが、集約したものを、その御、どう諏訪湖につなげ、保全していくかということを入れていただくとよい。

（田村委員）

- ・ 水質の常時監視や測定等を実際に行っている中では、こうした業務がほとんど外部委託となった場合には、検査・測定スキルを持つ職員がいなくなってしまうことが危

惧されると心配の声も聞かれる。外部委託の範囲については、現場の意見を聞きながら検討をお願いしたい。

(沖野委員)

- ・諏訪湖の特徴を踏まえた重点テーマ案として4つあがっているが、非常に具体的なものと、全体に関わるようなものと一緒に書かれているので、レベルを統一させる必要がある。

(今井委員)

- ・まとまってきたが、まだ具体的なところまでには至っていない印象。例えば、課題として連携が必ずしも十分でないとするが、どこが不十分なのか具体的な記載はなく、そのあとに連携を高めると書いているが、ではどうやって高めるのかは書いてない。データを集めても研究して成果を出さないと意味がない。ここで研究をやるからこそ重要なことがあるので、そうした方向性も示さないといけない。次のステップとしては、連携、データベース化等を具体的にどうやるかということ。
- ・連携も研究もデータベース化でも、誰かがリーダーシップを取らないと何も進まない。それは県がやるのか、それともセンターのか。県とセンターの役割を明確にする。リーダーシップを取ってやるのが非常に重要。

■ 諏訪湖環境研究センター(仮称)のあり方(素案) 連携・共同実施ほか

(小口主幹(岡谷市))

- ・市民研究会は、誰が仕切るのかということが出てくる。事務局はどこがやるのか、拠点はどこかという話も出てくる。拠点としては、環境学習、学びのスペースの部分に入ってくるのかと思ったが、そうした点から考えると、環境学習の300㎡では何が入るスペースなのかと感じてしまう。そうしたことも踏まえ、場所も考えないといけない。

(沖野委員)

- ・市民研究員を養成しないと市民研究会は設置できない。ただ集まるだけではなく責任を持って情報を伝えるグループを作っていくことが必要で、それが出来た段階でグループが動く。順をおってやっていくこと必要。市民研究会の設置ではなく、市民研究員の養成を運営への登用といった形で、まずは養成が必要。

(小口委員)

- ・新聞を見ていると諏訪湖に関する話題が一面トップに出てくることが多い。どういう機関が行っているのかをみると、その度、違う機関や団体の名前が書かれている。どういう組織が、どういう活動をしているのか分かっていない。そうした活動が全部、このセンターと結びついて一元管理できていると、研究だけではなく学習や市民研究員の養成がより効率的にできると思う。

(山崎委員)

- ・展示室や図書館、学びのスペースなどは専門性も必要だが、そもそもあまり興味の無

い人達が使ったことで諏訪湖に関心を持つきっかけとすることも必要。それができると、参加していた企業側が運営側にまわってくれる可能性がある。

(仙波委員)

- ・環境保全研究所飯綱庁舎にも環境保全研究所友の会というものがあり、会員相互の中で知識を高めていく仕組みを構築しているので参考となる。
- ・限られた予算、人員の中、センターが期待される成果を上げるためには、諏訪湖の特徴を踏まえた重点的な研究テーマを設定し、そこに重点的に取り組んでいくことも必要で、他の研究機関との連携で研究を実施していくことが何よりも重要。
- ・今年、環境保研究所が県内外から注目を浴びた研究成果が2つあった。いずれも研究所単独の調査ではなく環境研究推進費など国の助成を受け、国の研究機関や他の大学との共同研究として行ったもの。センターが発足してすぐに共同研究を立ち上げるのは難しく、センター開業前から他の機関との人事交流などを検討し、設置とともに円滑に共同研究ができる体制の準備が大事。共同研究を実施するには、センターの職員として核となる人材の確保が大事となる。

(今井委員)

- ・長野県の山岳地帯の気候変動適応の研究はレベルが高い。ただし、山だけである。国立環境研究所も適応センターでも情報やツールを出しているはずなので、それを水環境に変えれば推進費は取れるのではないか。そうしたことを積み重ねることで共同研究の目がでる。

(花岡委員)

- ・学びのスペースについて一番大事なことは、これを形にする時にどのようにしていくかということ。ただ物が置いてあって映像が流れているだけでは意味がない。湖周の小学生は諏訪湖に対しては、興味を持っている。諏訪湖は諏訪の人にとっては特別なものだという意識がある。この部分は力を入れていただきたい。

(下諏訪町 中澤係長)

- ・環境学習のスペースが想定規模で 300 m²とのことがだが、これが広いか狭いかは判断できない。1つに集約して行うのも大事とは思いますが、湖周には博物館をはじめ様々な施設があるので、そこを拠点に活用して分散した形で諏訪湖を学んでもらうのも1つの案かと思う。
- ・ヒシが繁茂する時期には住民から意見をいただく。生態学の研究者が不足しているとのことだが、皆、気にしている部分であるので、人材育成を進めていただきたい。

(降旗委員)

- ・水産試験場は農業関係の試験場で、産業振興主体に設置された研究機関であるので、環境主体のセンターとは一部なじめないところがあるが、方向性はほぼ一緒である。産業振興が研究の出口に必ずあることを念頭に置いているので、水産関係のことも頭に置きながら、自然環境だけでなく産業振興など地域の発展につながるものも考慮に入

れてもらいたい。

(小口委員)

- ・産業振興に近い話では、博物館もまわることをパッケージとするという体系ができると観光客も呼び込める。あるいは日帰ではなく1泊してもらおうとか、そうしたことにもつながると思うので、その点も考えられるとよい。

(今井委員)

- ・琵琶湖には博物館がある。スケールが違う。滋賀県では、小学生は船で琵琶湖を一度まわる。それが、インパクトが強く、大人になってからも愛する琵琶湖となる。300 m²のスペースを作って顕微鏡をと言ってもおもしろくない。もし、300 m²が確保できないなら、船を確保する方向も良い。

(沖野委員)

- ・センターの重要な課題として資料の収集と公開があるが、6市町にはそれぞれ図書館があるので、そういう施設と連携して、どこに何があるのかわかるようになればいい。そうした新しい形の資料収集、保管の方法を考えることが必要。全部を中に閉じ込めようとするとスペースが足りなくなるので、今ある各市町村のものも含めて考えていく。展示は各博物館にある。それを調べて、足りない部分で重要なものをセンターにおいて、あとはここに行けば見られますということでもよい。

(市川オブザーバー)

- ・水質環境保全がミッションとしてあるが、背景を学習するということを強調することも大切。自然は不変ではないし、人々の暮らしは不変ではない。データだけに価値があるのではなく、歴史を学べるようにすることが重要。では、なんのために歴史を学ぶのかと言ったら、未来のためで、未来に誤った選択しないためということである。
- ・だれがこのセンターの活動を必要としているのかを考えた時に、1つは河川・湖沼の水質保全とかの最先端手法を学びたい人にとって学べる場所、あるいは関心はあるが何が研究テーマか見つけるのは大変なので、今、何が研究テーマなのかを知れる場所。
- ・誰がターゲットなのか。学びたい人という学習者もターゲット、偶然訪れることによりそういうことがあるのだという学びもある。研究者として来訪する視察もある。周囲の関連施設と連携して大きなセンターとして仕上げる。計画的に役割分担すれば効果的にできる。そのイニシアチブをとるのが研究センターであるという考えもできる。
- ・長野県全体の河川のことをやるというが、千曲川で災害があったときに、それを諏訪湖に学びには来ない。諏訪湖に来たら諏訪湖にまつる歴史が学ぶというほうが素直。無理して全部を扱うよりも、諏訪湖にまつる歴史を深く学べたほうがよい。
- ・素案を見ると歴史、背景を学ぶとか、諏訪湖の歴史や文化について総合的に学ぶためとかあるが、何のためかというテーマを言わないときれいな話で終わってしまう。例えば、過去から学び、未来に間違った選択をしないために学ぶとか、そういう強いミッションを入れたための学習といったほうが、テーマが出るのではないかと思う。